

医療従事者向けサイト [m3.com] より、地域医療支援学講座の取り組みについて取材を受けた。一部を抜粋する。

## 【島根】新カリは5年生全員が地域で4週間実習、1人の患者にじっくり向き合う-佐野千晶・島根大学医学部地域医療支援学講座教授に聞く◆Vol.2

将来の医師過剰を避けるため、国が医学部の臨時定員枠を段階的に削減する方針を示す中、教育を担う大学は「数より質」へのパラダイムシフトを余儀なくされている。医師のキャリア支援に注力してきた島根大学医学部地域医療支援学講座では、医学生による海外雑誌への論文投稿や、地域に勤務しながらの学位取得などを積極的にサポート。地方の医療機関や自治体とタッグを組みながら、医師の資質向上に力を入れる同講座教授の佐野千晶氏に聞いた。（2022年2月22日インタビュー、計2回連載の2回目）



——国際基準に基づく医学教育分野別評価認証の受審が迫る中、2021年度から医学部のカリキュラムが変わりました。

5、6年生で実施していた診療参加型臨床実習（クリクラ）は従来、大学周辺の診療所などで実施する実習と、地域に出向いて行う実習の2種類をそれぞれ2週間ずつ行っていました。それを水平統合し、2021年度からは、5年生全員が4週間地域に滞在し、総合診療専門医プログラム責任者の下で実習を行うことにしました。学生を4週間、“国内短期留学”させ、大学内では学びにくいことをじっくり学んでもらうのが目的です。

島根大学附属病院総合診療センターの全面協力で、各施設が独自のプログラムを作成。1クール11人が17の医療機関に分かれ、実質的に総合診療を学べる場所で実習してもらうわけです。1人の患者にじっくり向き合える上、地域包括ケアにも関わることができています。新旧カリキュラムが混在する2021年度は、2月21日に最初の学生が4週間の実習に入りました。

「地域枠等」では、地域医療に貢献する志を入試で選抜します。しかし、そのような志が入学後に出てくる人もいないはず。教育熱心な総合医プログラム責任者の下で4週間実習すれば、地域での医療に関心を持つ学生が増えるのではないかと期待しています。

——2021年度、多くの医学生が英語で論文を執筆し、海外雑誌に掲載されました。

海外では、地域のシーズを大学に集め、学生が論文を執筆するケースは多くあります。試験管を振るような実験と違い、社会科学や行動科学などといった非実験系の研究は本来、地域と一体となって行った方が進みやすいです。しかし日本では地域の医師が忙しく、タスクシフトが取れていないことなどが要因でなかなか進んできません。今回は、医学部の非常に忙しいカリキュラムの中、休日や自習時間を使うなどして学生自身が努力をしたことに加え、臨床実習先の指導医が学生を細やかにフォローしてくれたので、論文が完成したのだと思います。

論文はゼロベースから自ら執筆するよりも、他人の文章を直す方が大変です。通常業務の傍ら、学生を指導してくれた雲南市立病院の太田龍一医師には大変お世話になりました。キャリアを重ねても内省的姿勢を保持している太田医師は、学生からも知識を得ようとする意識が高く、その姿勢が学生の意欲をより高めていました。医学教育理論を専門的に学んできた医師だからこそ、学生の力を引き出す力も大きかったようです。学生への指導は本人の学びにもなっているようです。太田医師は以前から知っていますが、サイエンスライティングが非常にハイレベルになってきており、当人の成長ぶりに驚かされています。

論文は、著者が亡くなってからも形として残るものであり、研究者にとってはわが子同然です。地域で見つけた課題に対し、仮説を立てて科学的に証明し、さらに査読を受け、レビューをもらって直し、社会発信していくという過程を早くから学べることは、学生にとっても大きいと思います。医師の仕事は本来、患者からの学びを自らに落とし込み、次の臨床に生かすという作業の繰り返し。英語で発表することで、若いうちから全世界につながりを持つこともできます。